

164 エルサレムのために嘆く、やもめの献金

マタイによる福音書 23 : 37~39、ルカ 13 : 34~35

マルコによる福音書 12 : 41~44、ルカ 27 : 1~4

・・・・・前回到続き、ニサンの月の12日(火曜日)の出来事である・・・・・

▶エルサレムのために嘆く (マタイによる福音書 23 : 37~39)

37 「(ああ、) **エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは(頑なに否定し) 応じようとしなかった。**

→エルサレムとは、エルサレムの住民であり、ユダヤ人のすべてである。

これらの者たちは、盲目の指導者に導かれ、誤った道に向かう悲劇の民で、預言者たちを殺し、神からの使者を石打の刑にしてきた民である。

→雛は危険を感じたら、めん鶏(雌鶏、母鳥)の羽の下に逃げ隠れる。



【参考】雌伏雄飛

活躍する機会を待ちながら人に付き従い、機会が到来すると大いに活躍すること。「雌伏」は雄鳥に雌鳥が従う、つまり、将来の活躍を待ち、人に付き従うこと、「雄飛」は、雄雄しく飛び立つことである。

38 見よ、お前たちの家 (→エルサレムにある神殿) は見捨てられて荒れ果てる。

→(回復訳) 見よ、おまえたちの家は荒れ果てたまま、おまえたちに残される。

→「家」は、神の家を指しているが、今やそれは「お前たちの家」と呼ばれています。なぜなら、彼らはそれを、強盗どもの巣にしてしまったからです(マタイ 21 : 13)。

→この預言は、24 : 2の預言と一致します。それはAD70年、後にローマ皇帝(在位 : AD79年~81年)となるティトゥスがローマの軍隊を率いて、エルサレムを破壊した時に成就した。

【参考】エルサレム攻囲戦

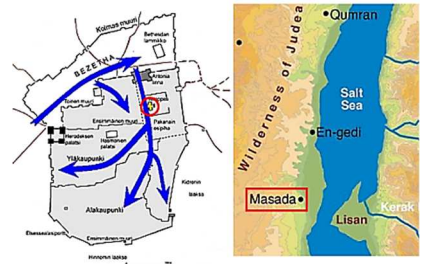
AD70年4月14日、エルサレムにおいてユダヤ属州のユダヤ人と後にローマ皇帝(在位 : 79~81年)となるティトゥス(ラテン語 : Titus)が率いるローマ軍の間に起きた攻囲戦(攻城戦)である。

これによりローマ軍は、エルサレムを陥落、市街地のほか、BC1世紀末にヘロデ大王によって増修築された、聖地エルサレム神殿(○印)も破壊した。

一部のユダヤ人はマサダ砦に逃れ、73年に玉砕するまで戦い続けた。このローマ帝国との攻囲戦で国を失ったユダヤ民族は各地に離散した(ディアスポラ※1)。

そして、神殿が崩壊した日は、ユダヤ教とユダヤ人の歴史の中で、「民族の悲劇の日」とされ、「ティシューア・ベ=アープ」と呼ばれる悲しみの記念日とされている。

左図 : 当時のエルサレム市街。○がエルサレム神殿、青の矢印がローマ軍の攻撃の経路。



※1 : ディアスポラ Diaspora (民族離散) は、「(種などが) 撒き散らされたもの」(ディア[分散する]+スピロ[種をまく]) という意味のギリシア語に由来する言葉です。

①中世以降ドイツ、次いで東欧に移住し、ナチスのホロコーストの犠牲になった「アシュケナジム」や②スペイン、北アフリカなどに移住した「セファルディム」は有名である。

同じ意味で、③華僑、印僑、日本人のディアスポラ(日系人)などにも使われている。

また、ディアスポラは、元の国家や民族の居住地を離れて暮らす国民や民族の集団ないしコミュニティ等も指すようにもなった。

参考・出典(左図) : ウィキペディア「エルサレム攻囲戦」他

【参考】無識の指揮官は殺人犯なり

海軍大学校の戦術教官（海軍中将）となった秋山真之※が、艦隊指揮をとる将官の判断一つで兵の生死が左右されることを語ったものです。秋山真之が行った授業はケースメソッド（実際の事例研究を重視した教育方法）でした。知識は自分たちで書物から得、それを緊迫した模擬実戦の場で試し、そこから自身の考え方を導くものでした。

※秋山真之

16歳の時に中学を中退、上京して友人の正岡子規と共に東京大学予備門で学ぶ。その後、兄 秋山好古の勧めで海軍兵学校に入学し、首席で卒業する。明治27年、筑紫の分隊士として日清戦争に従軍した。

明治30年、米国留学を命じられ、マハンから海軍戦術を学ぶとともに米西戦争を視察。帰国後は海軍大学校の戦術教官となり、兵棋演習を取り入れるなど体系的な海軍戦術教育を行った。



39 **言うておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言うときまで、今から後、決してわたしを見ることがない。」**

→(リビング・バイブル)はっきり言うておきます。神から遣わされた方を喜んで迎えるようになるまで、あなたがたは二度とわたしを見ることはありません。

→詩編 118：26

祝福あれ、主の御名によって来る人に。わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する。

▶やもめの献金（マルコによる福音書 12：41～44）

・・・ここでの出来事は、公生涯最後の出来事である。これを最後にイエスは神殿から離れる。・・・

41 イエスは（それぞれ目的の異なる13個の）**賽銭箱**（→献金箱）の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。

→じょうご（漏斗）形の賽銭箱は神殿内の「婦人の庭（女性の中庭）」に設置されていた。

婦人の庭に設置されている理由は、男女の区別なく献金が出来るようにするためである。

42 ところが、一人の貧しいやもめが来て、（ギリシア通貨の）**レプトン銅貨二枚**（1デナリオンの $1/128 \times 2 = 1/64$ ）、すなわち（ローマ青銅貨の）**一クアドランス**（約150円）を入れた。

→ギリシア通貨のレプトンは、コインの最小の銅貨で、1デナリオンの $1/128$ 。クアドランスはローマ青銅貨で1デナリオンの $1/64$ である。重要なのはこの未亡人の信仰に基づいた献金が、彼女の全財産だったことです（12：44）。



43 イエスは、①弟子たちを呼び寄せて②言われた。

「はっきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱**に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。44 皆は有り余る中から入れたが、この人は、**乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。**」**

→賽銭の「賽」は「神恩に報いる」という意味です。


日本では、賽銭は「散銭」とも書かれ、神前に撒き散らす米（供える米）を「散米」ということから、「散米」に由来すると言われています。

賽

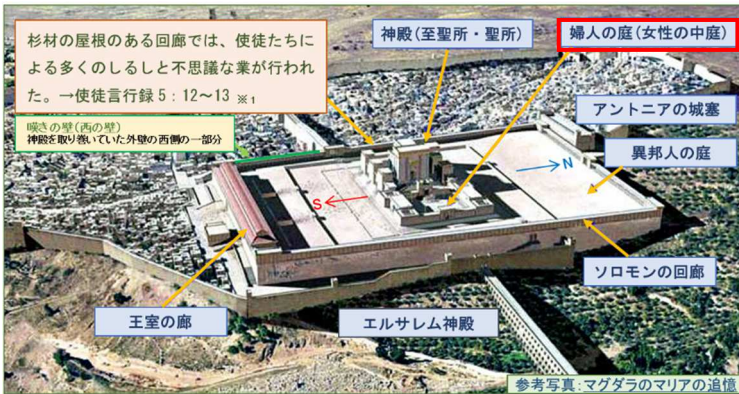
①神に報いる。お礼祭。おまいり。神から受けた福に感謝してまつる。「賽願」「賽銭」

②優劣をきそう。「賽馬」

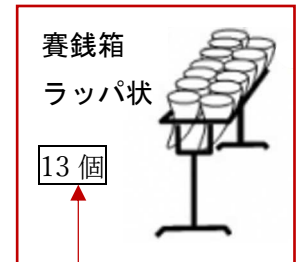
③さい。さいころ（訓読み）。

参考動画  YouTube ^{JP} : <https://www.youtube.com/watch?v=e1G-aZIempw>

【参考】 宝物殿の賽銭箱

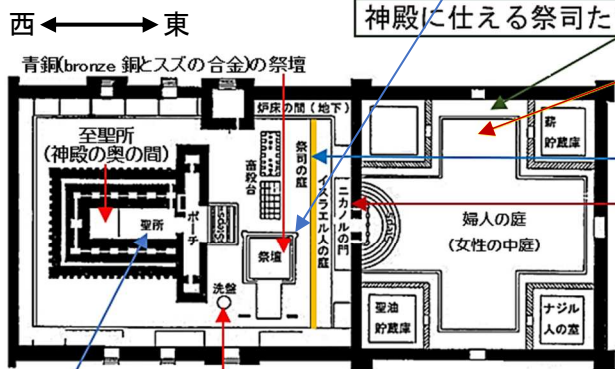


神殿の宝物殿には祭司だけしか入れなかったため、イエスが宝物殿でファリサイ派と話をしたとは考えにくい。恐らく、神殿宝物用の賽銭箱（献金箱）が設置されていた「婦人の庭（女性の中庭）」のことであろう。



⑨ 宝物殿は、ヨハネによる福音書 8：20 の聖句にしか登場しない。

※参照：106 仮庵祭でのイエス(3)
 マイム・マイム Mayim Mayim「水取りの儀式」



賽銭箱(マルコ 12:41、献金箱:LB)が置かれていた
 イスラエル人の庭と祭司の庭は低い壁で分けられ、祭司だけが、壁の向こう側に行くことができた。
 イスラエル人の庭への出入口
 ニカノルというユダヤ人が奉獻したコリント産の銅で造られた立派な門。
 女性はここから先に入ることはできなかった。

青銅(bronze 銅とスズの合金)の洗盤←本来の青銅は、黄金色や白銀色の金属光沢である。(参)黄銅(真鍮:brass)は、銅と亜鉛の合金

▶ 聖所には金の燭台(=メノラー、打ち出し造り)と聖なるパン(→神が神殿に臨在することを表す)のための金の机(聖卓：歴代誌下 4：8)、香を供えるための香の壇(金の祭壇：列王記上 7：48)があった。

【参考】 宝物庫 the treasury

